

西真寺 寺報

平成二十八年 夏号

挨拶

猛暑の候、平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。御門徒様におかれましては、如何お過ごしでしょうか。

父 西照院釋長弘 母 玲玉院釋弘真の葬儀にご参列、ならびに多大なるご厚志をいただきまして誠に有難うございます。

父は、真宗の教えを長きに渡り弘め導き、西真寺の為にその生涯を尽くされました。西真寺の御門徒と共に学び成長し、今も西方浄土より、我々に常に問いかけ続け、私たちと向き合い、私たちに仏道を照らしてくれまます。法名は西照院釋長弘とさせていただきますました。

母も真宗の教えを弘め、住職とともに仏道の人生を歩まれました。玉が触れ合つて出る澄んだ音、玉のような美しさを持った宝の玉、美しさの象徴であり、だからからも慕われ、親しまれた方でしたので、玲玉院釋弘真と付けました。

生前は大変お世話になり誠に有難うございました。故人に代わり寺を代表してご挨拶申し上げます。有難うございました。

この度、二人の布教に対する意思を継承する為に、西真寺の寺報を発行させて頂くことに成りました。

蓮如上人は、全国の御門徒向けに手紙を送り、解りやすい内容として布教に役立てたと申します。これが後の御文章となり現在も法要の最後に拝読されます。私の文章は、解りにくく、広く伝わるものではありませんが、現代社会における仏教の在り方を念頭に毎回テーマを持って説明してゆきたいと考えております。

釋直徳

■現代の仏教用語

・旦那とお布施

旦那様とは、夫やお客様、主人の意味として使用しています。また、お布施とは、年忌法要や葬儀の際に僧侶に対して渡すお金をさしています。この二つの語源はインドのサンスクリット語である「ダーナ」から成立しているのです。ダーナに音の漢字を当てた際に「檀那」、意味を布施と訳した為、同じ意味になるのです。二つの意味は、「ほどこし」や「与える」ですが、檀那は、施す人を指すようになり、法施（仏教の教えを施す）をする寺を「檀那寺」、財産を布施する（財施）家を「檀家」と呼ぶようになったのです。布施は、葬式や法事費用の一部である「お経代」として捉える方がほとんどです。しかし、布施は本来菩薩行の一つであり、らっばらみっ六波羅蜜の第一の行で、モノやお金に対する執着を捨てて、惜しみなく他人に与え、共に助け合う精神性を養う行為の言葉なのです。葬式や法事の際に布施を与える行為は、亡き人が、この世の中の価値が全てお金になれば、本当のしあわせは得られませんよと問いかけているのかもしれない。なぜなら亡き人が菩薩行の機縁を与えてくれたからです。布施は、亡き人の為にどの位執着心が捨てられるかのものさしを与えられた一つの行なのです。

・和顔愛語

もちろん、お金やモノがなくてもできるほどこしはあります。相手に安心を与え、恐怖心を取り除く「無為施」です。例えば、相手に対してやわらかな表情で接し、優しい言葉で話す「和顔愛語」があります。相手の立場に立って話をよく聞き、もし自分だったらどう考え、どう思うかという想像力を駆使し、相手の気持

ちに沿うことで、共感が生まれ、相手を理解することで相手を受け入れることができる。相手の心をくみ取る器がなければ、「和願愛語」は難しくなります。この精神は、仏教ホスピスであるピハ―ラ活動の基本です。本来看取りや看病とは、「看護福田は第一の福田なり」（『梵網経』）とあるように、仏教の重要な行いであり、仏教修行者を看病者と言いました。

観察

物事のありのままの事象を、客観的に見極める意味で使われますが、仏教では「かんざつ」と読み、仏の知恵を視点に用いて、自分と他者や身の回りの現象をありのままに観ることを指します。一般的な意味との違いは、自分がその中に含まれていることです。一般的な観察の意味は、自分が含まれていない場合で、無責任な傍観者で見る側の倫理に偏る、つまり他人事ということになります。関西の間は、アホと言われるてもあまり怒りませんが、関東の人に同じ意味でバカと言われると反発します。このアホとバカの違いは、アホは自分のこともアホであることが含まれているからで、バカという人は、自分はバカではないという意味が含まれていてからだと思えます。アホはお互いさまで、仏教的な視点が用いられ、バカは他人事になり、科学的な観察を意味します。

■大切な方を失った皆様へ 真宗門徒としての報恩講

報恩講とは、親鸞聖人の御祥月命日に勤められる法要の事で、真宗門徒にとって一年で最も大切な仏に遇うご縁であり、聖人を追慕し、報恩感謝の念仏を行じるお勤めとなります。

しかし近年、科学の知を拠り所とする合理的な価値観から、損得や好き嫌いで行動する傾向が多く見受けられる一方、御縁による報恩感

謝に対する価値観を失っている為なのか、報恩講に参る門徒さんの数もここ数年減少しております。

今の社会情勢には、その「報恩感謝」よりもその場しのぎの生き方の蔓延が見受けられます。仏教はこれを三つの「もとどり」、すなわち勝他・利養・名聞（世間の評判や名誉、財産や利得を貪り求める事）として示しています。この価値観を否定するつもりはありませんが、少なくとも大切な方を失った人だけは、この「もとどり」よりも亡き人との絆や御縁に対し、より価値観を見出ししていると確信して止みません。

生きる上で大事なものは何なのか？勝他・利養・名聞を全て捨てた親鸞聖人は750年後の我々に今も問いかけてくれます。聖人は「信謗、共に因と為りて、同じく往生浄土の縁を成ず」（式文）と門徒の方々に語られたといえます。信心の有無にかかわらず、亡き人に追慕し、頂いた御恩に対し、報謝の念仏の御縁として大切にしましょうと聖人は問いかけているのです。

亡き人はまた、縁の大切さを気づかせてくれた聖人に遇う御縁を勧めていたのではないのでしょうか？門徒として生き、門徒として亡くなられた人達から願われた「いのち」を生きている我々は、亡き人達の残してくれた絆に思いを馳せ、報謝の心を抱きながら親鸞聖人に遇う事で、報恩の念は初めて成就し、再生の節目を迎えるのです。

そこでお願いです。この一年の間に大切な方を亡くされたばかりの門徒さんには是非、お寺の報恩講にお参りにおいで頂きたいのです。亡き人からの願いは、時間と共に私を忘れて往く前に真宗門徒としての御縁を大切に歩みながら生きてほしいという、一念です。その報恩謝徳に沿う義の確認が報恩講です。

合掌

■西真寺 行事のご案内 報恩講

十月十日（月） 十時より お斎 十二時

■次号は、「葬式を考える」を予定しています